

学際的な分野のための《複合的》ゼミ運営法

神尾 達之・福田 育弘

キーワード：学際、ゼミ、複合的、教員、学生、協力

【要旨】近年、学生の関心は学際的になり、それに対応する形で学際的な内容をもつゼミの必要性が高まってきた。しかしながら、ゼミを運営する教員の多くは学際的な教育を受けていない。このギャップを埋めるための方策として《複合的》ゼミ運営法を提案する。本研究では、

① まず二つの仮説を立てた：

テーゼ1：学際的なテーマが設定されている授業では、二人以上の教員が同時にゼミに出席し、ゼミの前後でも協力することで、ゼミをいわば「立体化」しなければならない。

テーゼ2：学際的なテーマが設定されている授業では、教員のみならず学生どうしの協力が不可欠であり、かつ、この協力によって年度ごとに到達できた成果をそのままのレベルで次年度に継承させなければならない。

② 次に、その仮説の正当性を検証するためになされた「合同ゼミ」の実践を報告し、③ 最後に、《複合的》なゼミ運営を持続し、他の教員も実現できるようにするために、《複合的》ゼミ運営法の問題点を列挙し、想定できる改善案も記した。

1. 研究の動機：学際的な分野のためのゼミをめざして

2007年4月、教育学部では学際コースを発展・継承する形で複合文化学科が創設された。複合文化学科の名称が示すとおり、この学科は、従来タテ割りで区分されていた専門研究の枠組みを超えて研究と教育を展開することをめざしている。複合文化学科の理念は大きく四つの方法論によって実現される。① 複数性：単一とみなされている文化も、その淵源にまでさかのぼったり、構成要素を吟味したりすると、それが異文化との融合や異文化の輸入を経て現在に至っていることが判明する。② 多面性：扱うメディアを文献に限定しない。アート、マンガ、映画、テレビ、ゲーム、ミュージカル、オペラ、音楽も考察対象となる。もちろん文献が排除されるわけではない。ただし、伝統的な文字史料や文学作品のみならず啓蒙書や新聞・雑誌もメディアとして扱われる。③ 多元性：分析ツールとして複数の理論を使えるようにする。精神分析、記号論、言説分析、カルチュラル・スタディーズ、アナル派歴史学、メディア論などの理論枠のみならず、それらの理論のキー・コンセプトにも学生が通じることができるようカリキュラムを準備する。④ 複合性：既存の学問分野は有効利用しなければならない。社会、政治、経済、歴史、芸術などに専有されていた知識を脱領域的かつ横断的に活用する。

このことから必然的に帰結されるのは、複合文化学科の学生の学問的関心の方向性が多岐にわたっているということである。しかも、学生の学問的関心は教員の研究の方向性とはかならずしも一致しない。いや、一致しない場合のほうが多いだろう。勉学に対する学生の動機づけが生き

生きとしたものであっても、教員がそれに十分に対応しないことがあれば、学生の勉学意欲が低下していくのは当然のことである。伝統的な学問分野の場合は、専門分野そのものに対する学生の初発の動機が低くても、学年があがるにつれてむしろ専門への関心が高まる可能性があるが、学際的な分野ではそれとはまったく逆の現象が起こりかねない。

したがって、学際的な分野に進学した学生のようなニーズに対応するためには、指導する教員自身が学問的な視野を広げ、上述したような方法論を身につけることが求められる。しかし、これは容易ではない。そこで、私たちは、ゼミの運営の仕方そのものを工夫することで、学生の多様な関心に応えるということを提案する。本研究は、本学以外でもこれからますます増えるであろう学際的な分野に進学する学生が、初発の生き生きとした動機を大学のカリキュラムのなかで展開することができる方策の一つとして、汎用性のある《複合的》ゼミ運営法を構築することをめざしたものである。

以下ではまず、①学際的なテーマ設定がなされている授業では《複合的》ゼミ運営法が必須であることを、簡単なテーゼで表現したあと、②そのテーゼの正当性を検証するためになされた「合同ゼミ」⁽¹⁾の実践を報告し、③最後に、《複合的》なゼミ運営を持続し、他の教員も実現できるよう、その汎用性を高めるために、《複合的》ゼミ運営法の問題点を列挙し、想定できる改善案も記しておきたい。

では、まずテーゼを挙げておこう。

テーゼ1：学際的なテーマが設定されている授業では、二人以上の教員が同時にゼミに出席し、ゼミの前後でも協力することで、ゼミ自体を「立体化」しなければならない。

テーゼ2：学際的なテーマが設定されている授業では、教員のみならず学生どうしの協力が不可欠であり、かつ、この協力によって年度ごとに到達できた成果をそのままのレベルで次年度に継承させなければならない。

2. 研究の実践：《複合的》ゼミ運営法の実践

以下では、上記の二つのテーゼを検証するために、二人の教員が行った合同ゼミの実践活動を報告する。まず、この合同ゼミを実行するために準備したいくつかの「装置」を紹介する。しかるのちに、この合同ゼミが実行される一年間の経過について説明する。

2.1 ゼミ運営のための「装置」

合同ゼミは早稲田大学教育学部のカリキュラムにてらしていえば、四つのゼミから構成されている。それら四つのゼミを二人の教員が運営する。二つの中心をもつ四つの集合体が、自己組織化するために五つの「装置」を投入した。

2.1.1 『ゼミを10倍活用するために』

ゼミの初回は、通常ガイダンスに使われる。ガイダンスでは授業の目的や単位のとり方などを説明する。合同ゼミの初回は、一般にガイダンスでおこなわれる履修上の注意事項を説明するだけにとどまらない。私たちは、ゼミの新しい参加者がゼロから出発するのではなく、過去の合同

ゼミの到達点から出発してほしいと考えた。ただし、新しい参加者がゼミの伝統を継承するということに力点がおかれているのではなく、新しいゼミの開始にあたって新しい参加者が前年度までの合同ゼミの積み上げの成果を自覚することが目的である。ガイダンスと前年度までのゼミの到達点の周知という二つの作業を90分間のなかで実現するために、前期のゼミの初回に『ゼミを10倍活用するために』⁽²⁾という冊子を配布した(図1)。

全体は大きく三つの部分に分かれている。ガイダンスを目的とした「Ⅰ. ゼミに参加するための注意事項」、前年度までのゼミの到達点の周知を目的とした「Ⅱ. ゼミを活用するためのアドバイス集」、前年度のゼミ論と卒業研究より水準の高い論文を執筆するためのアドバイス集であ

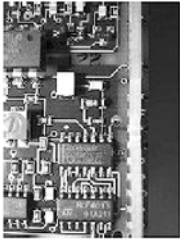
ゼミを 10 倍活用するために	
	
早稲田大学教育学部学際コース	
2008 年度「現代文化演習 I-IV」	
(神尾+福田合同ゼミ：水曜日 4+5 時限)	
I.	ゼミに参加するための注意事項 2 頁
II.	ゼミを活用するためのアドバイス集 6 頁
A)	テーマの探し方 6 頁
B)	資料の探し方 9 頁
C)	プレゼンテーションの仕方 12 頁
D)	コーディネーターの役割 16 頁
E)	ディスカッションの極意(コメント付き) 19 頁
F)	ゼミ論の書き方 21 頁
G)	パワーポイントの心得 25 頁
H)	Google 検索設定について 27 頁
III.	ゼミ論・卒業研究を執筆する前に(卒業生たちの反省点) 32 頁
IV.	付録 1: 卒ばらしい卒業論文をかくために 34 頁
V.	付録 2: 就活で役に立つスキル 35 頁

図1：『ゼミを10倍活用するために』の表紙

る「Ⅲ. ゼミ論・卒業研究を執筆する前に（卒業生たちの反省点）」の三つである。これに二つの付録が付いている。一つは「Ⅳ. 付録1：すばらしい卒業論文をかくために」で、ここには、卒業研究を執筆している学生に向けて教員が12月末にメーリングリスト（後出）で配信したアドバイスを再録されている。もう一つは、ゼミの参加者が卒業時に書き残していった「Ⅴ. 付録2：就活で役に立つスキル」である。以下、「Ⅰ. ゼミに参加するための注意事項」と「Ⅱ. ゼミを活用するためのアドバイス集」についてのみ詳述する。

「Ⅰ. ゼミに参加するための注意事項」では、「授業の目的」、「授業の進め方」、「単位をとるために」、「成績の算出方法」、「レジュメの書式」、「掲示板の書き方」、「メーリングリスト」、「各種アドレス」について、かなりくわしく解説した。とくに「成績の算出方法」は厳密にし、事前に情報開示するようにつとめた。こうすることによって、採点の平等性が保たれると同時に、二人の教員への学生からの信頼度が増すことを期待した。

採点にあたっての大枠の原則は、発表を100点満点、ゼミ論を100点満点で、二人の教員が各自採点し、これに100点満点の出席点を加算し、合計300点を3で除し100点満点の採点とした。

発表（100点満点）の内訳は、指定文献に関する発表がおこなわれる前期は、口頭：20点、要約：20点、自分の意見：20点、レジュメ：20点、コーディネーター（後出）：20点とし、テーマを自由に設定して発表がおこなわれる後期は、口頭：40点、内容：20点、レジュメ：20点、コーディネーター：20点となっている。

ゼミ論（100点満点）の内訳は前期後期ともに、発想：20点、構成：20点、分析：20点、概念化：20点、文章：10点、参照：10点である。

出席（100点満点）の内訳は、前期は、現場での出席1回につき3点、「掲示板」へのテキストの感想の書き込み1回につき2点、「掲示板」への発表に関する意見の書き込み1回につき3点、後期は、現場での出席1回につき4点、「掲示板」への発表に関する書き込み1回につき4点とした。その他、今年度より、前期については、前年度の『卒業研究論文集』掲載の論文一編（担当したい論文の希望をつり全員に配分）について、不適切な文章表現を指摘し改善策を示す（5点）、後期については、『卒業研究論文集』に載った20編の論文のうちもっともよいものももっともよくないものそれぞれ一編ずつ選ぶ（15点）を加えた。

「Ⅱ. ゼミを活用するためのアドバイス集」は、歴代のゼミ生たちが卒業時に加筆し改訂した文章であり、まさにゼミの毎年の到達点を示す内容となっている。項目名だけを以下に挙げておく。「A）テーマの探し方」、「B）資料の探し方」、「C）プレゼンテーションの仕方」、「D）コーディネーターの役割」、「E）ディスカッションの極意（コント付き）」、「F）ゼミ論の書き方」、「G）パワーポイントの心得」、「H）Google検索設定について」の8項目である。

2.1.2 ホームページ

合同ゼミでは授業の前後の作業が多い。2008年度以降はコース・ナビの機能が増え使いやすくなったが、カリキュラム上は四つのゼミから構成されているので、同一の情報を同時に伝達するためにはコース・ナビは煩瑣である。⁽³⁾そこで、合同ゼミ独自のホームページ⁽⁴⁾を開設した（図2）。トップページにはゼミの紹介と最新の連絡事項が記されている。



図2：合同ゼミのホームページ

このホームページには、「授業とイベント」、「レポートを書くための小さなヒント集」、「配付資料」、「思い出」、「リンク集」、「掲示板」（後出）が下層している。「授業とイベント」では、毎回の発表者とコーディネーターの発表風景を掲載し⁽⁵⁾、その横に、発表テーマを記載した。発表テーマをクリックすると、その回のレジюмеをダウンロードすることができる⁽⁶⁾。これによって、欠席者も発表内容の概略を知ることが可能になった。なお、ダウンロードできるワード・ファイルにはパスワードがかけられている。「授業とイベント」のウェブ・ページには、合宿や懇親会の写真も掲載した。ただし、画像ファイルはやはり「重い」ので、年度の変わり目には、それを「思い出」のウェブ・ページに移行した。

「レポートを書くための小さなヒント集」では、「ゼミのプレゼンで成功するためのステップ」、「自分のPCにパワーポイントがインストールされていないが、ゼミではパワーポイントでプレゼンしたい人のためのアドバイス」、「日本語の作文力をレベルアップするための推薦図書」、「ゼミ論や卒業研究のための資料集」、「Word2007を使ってレポートを書いた人のために」、「Wordに画像を貼り付けたい人のために」、「Wordの「脚注」機能の使い方」、「返却されたゼミ論で復習する方法」、「Wordの「修正の履歴」の使い方（ただし、Word2003）」、「日本語作文でわかりやすい病例集」、「無事に卒業するためのファイル管理」のように、主としてデジタルファイルの扱い方を解説している。

ホームページの主たる目的は、同一の情報を同時に伝達し、学生がいつでも発表のレジюмеをダウンロードできるようにしておくことだが、煩瑣をいとわなければ、これらの作業はコース・ナビでも可能である⁽⁷⁾。ただしコース・ナビは原則として、当該の科目を履修している学生だけがアクセスできるシステムである。誰もがアクセスできるホームページ上で合同ゼミの情報を開示することで、この合同ゼミに関心をもっている次年度以降の学生もゼミの内容をつかむことができる。学生が自分にふさわしいゼミを選ぶ手掛かりを提供したいというのも、このホーム

ページを開設した理由の一つである⁽⁸⁾。

2.1.3 掲示板

合同ゼミでは、本来の授業の前と後でデジタルな「掲示板」に「書き込み」をすることが学生の「課題」になっている。前期は与えられたテキストを予習し、そのテキストについての感想や疑問を手短に「掲示板」に書く(図3)。これによって、①すべての学生が事前にテキストの内容に通じることになるので、授業内の発表ではテキストの要約に多くの時間をさく必要がなくなる。また、②発表者とコーディネーター(後出)は「掲示板」の「書き込み」を読むことで、他の学生の関心のありかやテキストの問題点を発表の前に知ることができる。そして、それらを発表のなかに組み込むことで、発表をよりインタラクティブなものにすることが可能になる。なお、後期は参加者全員が同一のテキストを読んでくれることが前提とされない自由発表なので、発表の前の「書き込み」はない。

「掲示板」の本来の機能は、①限られた時間内でおこなわれるディスカッションで言えなかったことや、授業終了後に思っていたことなどを、発表に対する感想・意見・疑問・補足・展開として表明することである。大多数の「書き込み」は、「プレゼン」、「コーディネーター」、「内容」、「レジュメ」などにカテゴリー分けされている。カテゴリー分けされることで、「おもしろかった」とか「わかりやすかった」のような漠然とした感想はほとんどみられない。

「掲示板」への「書き込み」を習慣化することで、②参加者たちは発表を漫然と聞くのではなく、発表の形式や内容に対して批判的になることができる。このため、自分が発表者やコーディネーターでない回でも、発表に対して積極的に取り組まざるをえなくなる。

二人の教員が予想していなかった「掲示板」の最大の効果は、③ゼミ論や卒業研究を執筆する際に、自分の発表に対してなされた「書き込み」から新たな発想や見落とししていた欠陥などを知ることができるという点である。多くの学生が、自分の発表回の「書き込み」をすべてプリントアウトし、それを熟読したあとに、ゼミ論や卒業研究の執筆にとりかかったと述べている。

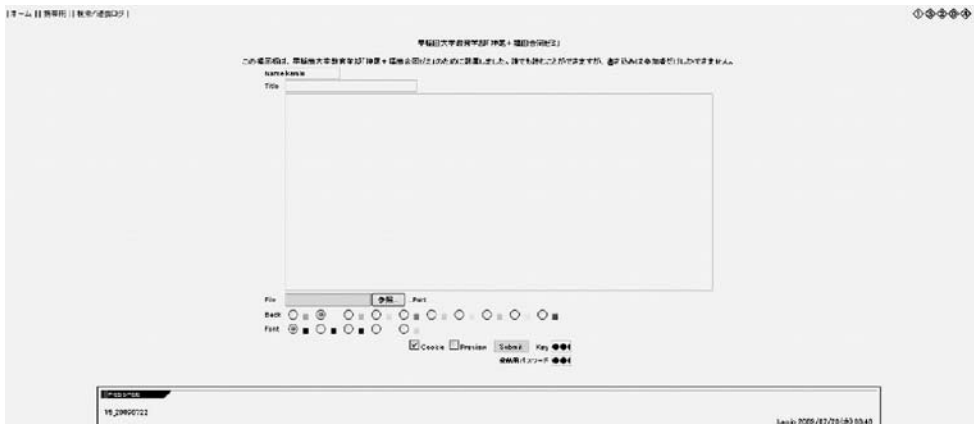


図3：合同ゼミの「掲示板」

④ オープンな「掲示板」に「書き込み」することで⁽⁹⁾、学生はゼミ生以外の他の読者をも想定した文体を選ぶようになる。このようにして、少しずつではあるが、日本語の作文技術も確実に向上する。

⑤ また、次年度以降の学生はこのオープンな「掲示板」をながめることで、ゼミにおける議論の水準を知ることができる。

さらに付言しておけば、この掲示板には、二名の教員もかなり詳しい書き込みを行っている。往々にして、ゼミでは教員は上からの助言者の位置にとどまるが、合同ゼミのディスカッションでは、「学生が主役である」との理念から、教員と学生が手を挙げている場合、学生に発言の優先権を認めている。もちろん、場合によっては、議論が錯綜したり、学術用語や概念が誤った意味で使用されることもありえるので、教員が学生より先に発言をすることも起こりうる。ただし、ディスカッション全体を通じて発言者の指名権はコーディネーターに委ねられており、このような状況判断もコーディネーターの重要な役割の一つとなっている。

2.1.4 論文集

三年生と四年生のゼミ論を集めたゼミ論集（前期）、三年生のゼミ論を集めたゼミ論（後期）⁽¹⁰⁾、四年生が提出した卒業研究を集めた論文集（後期）の三冊を冊子体で印刷し学生に頒布している。ゼミ論にせよ卒業研究にせよ、「編集」された論文を掲載している。ここでなされる「編集」とは、以下の二つのプロセスを含んでいる。

教員は、学期末ないし学年末に提出されたゼミ論と卒業研究を「添削」する。この「添削」の前提として、学生はゼミ論をワード・ファイルで提出することが求められている。教員はワード・ファイルで提出された論文をワードの「修正の履歴」機能を使って、「赤」で文を修正したり、提案や評価を「コメント」内に記載する。添削終了後に教員は各学生に、添削済みのワード・ファイルを添付ファイルの形で送信する。学生は一定の期日までに、それらの添削済みのワード・ファイルをチェックした上で、ゼミ論ないし卒業研究の改訂版を教員に送りかえす。これが「編集」の一次プロセスである。

「編集」の二次プロセスは、送られてきた改訂版の書式を統一することである。学生には事前に書式を指定しているが、デジタルファイルの扱いに慣れていない学生のなかには、書式のディテールにまで神経がいきとどかない者も少なくない。ゼミでの発表、「掲示板」による批評、執筆、添削といった作業を通じてできあがった改訂版は、個々の学生にとって文字通り労作である。論文集の体裁もまた、この労作を収納するにふさわしい形でなければならない⁽¹¹⁾、というのが合同ゼミの考え方である。

このように論文集を名実相伴うものになっているのは、① 学生たちが自分たちのゼミ論や卒業研究を一種の「作品」と見なすことができるようにし、② 次年度のゼミ生にそれらの「作品」を参考にしてもらうためである⁽¹²⁾。

2.1.5 コーディネーター

合同ゼミの《複合性》は、その形態と方法論に限定されない。学生どうしの協力もまた、《複

合性》の理念に含まれる。もちろんこれは、相互協力そのものをいわば「教育的配慮」から自己目的化してのことではない。協力することが自己完成につながるという流れを学生に体感させることが必要だと考えたからである。協力することが自己完成につながるという理念を、下世話に言い換えればギブ・アンド・テイクの精神である。ギブ・アンド・テイクはつきつめれば打算に発する。しかしながら、二人の教員は合同ゼミを運営するなかで、ギブ・アンド・テイクの精神は最終的に、打算によって算出され期待された結果よりもより大きな成果を生み出すことを目撃してきた。それは協力の喜びであるとともに、一方的に協力している自分が自覚しないままに、実はその協力が喜びが自分の栄養になっていることを発見するという自乗された喜びである。このことがもっとも鋭くあらわれたのがコーディネーターという「装置」だった。

合同ゼミではすべての学生は発表者になるだけでなく、コーディネーターをつとめることが義務づけられている。当初コーディネーターはプレゼン⁽¹³⁾の司会をすることだけを求められていた。発表者の名前と発表のタイトルを告げて、発表者にバトンを渡す。発表が終わりディスカッションが始まると、ディスカッションの司会をする。これだけだった。しかし、コーディネートはじょじょにエスカレートし、まずはプレゼンの開始が「導入」として独立するようになった。「導入」では、ツカミの話題が口にされるだけだったのが、話題が寸劇になり、寸劇が独立したパワーポイントへとひろがっていった。そこでは、プレゼンの内容を先取りする具体的な事例が紹介され、その事例にひそむ問題が疑問文として提示されて結ばれる。プレゼンが終わると、コーディネーターは、プレゼンの内容を手掛かりにして「導入」で提示された疑問文への解答を提示する。コーディネーターによるこの操作が、プレゼンからディスカッションへのみごとな橋渡しになることもまれではない。

コーディネーターはさらに、発表の準備にも付き合うようになった。後述するように、発表者はおそくとも発表の一週間前までには最低一回、教員に発表内容を相談することがなかば義務づけられている⁽¹⁴⁾。当初、研究室を訪れるのは、発表者だけだったが、最近ではほとんどのコーディネーターがこの時点で発表者に同行し、発表内容の把握につとめている。そのみならず、発表者のフィールドワークに付き合うコーディネーターも出てきた。

くわえて、コーディネーターが発表者の予行練習の聞き手を引き受けるということが一般化している。その際にコーディネーターは、発話やレジュメの改善点を指摘し、場合によっては内容へのつつこんだ意見表明がなされる場合もあることが報告されている。

これらの協力作業によって益を得るのは発表者だけではない。コーディネーターもまた、コーディネートの経験を積むにしたがって、自分が一種のプロデューサーの役割を果たしていることを実感するようになる。

2.2 ゼミ運営の一年

合同ゼミは、カリキュラム上は前期と後期の二つの時期に区分され、二回成績を出すことが求められている。それゆえに合同ゼミの運営も学期の区分に拘束される。以下では、ゼミ運営の時系列を、前期開始前、前期中、前期終了後、後期開始前、後期中、後期終了後の六つに区分して概説し、合同ゼミを補足する合宿についても手短かに報告する。

2.2.1 前期開始前

合同ゼミは前期も後期もプレゼンのフォーマットはほぼ同じだが、プレゼンの前提が異なる。前期は二人の教員がそれぞれのテーマにそってあらかじめ決めておいたテキストを、学生たちが事前に予習し、そのテキストにそくして発表者はプレゼンをおこなう。それに対して、後期はテキストが決められておらず、いわば自由発表のかたちをとる。

したがって、前期が始まる前に教員がしなければならないのは、テーマの設定とそのテーマにそったテキスト群の選定である。テキスト「群」と書いたのは、テキストが一冊ないし二、三冊の書籍に限定されないからである。合同ゼミは一冊の書籍を半年で講読するという形をとっていない。

テーマは大枠となる通年テーマと各回テーマの二つに分けられる。2008年度は神尾の通年テーマは「コの世界 —《私》を倫理化するために—」で、福田の通年テーマは「風景のコンフィギュレーションと飲食というプラティック」だった。また、神尾の13回の各回テーマは、「《私》という単位」、「《私》探しの起源」、「《私》の内なる他者」、「《私》の輪郭線」、「《私》たちを使う遺伝子」、「隠喩としてのエイズ」、「《私》の崩壊をめぐる美学」、「《私》たちのネットワーク」、「大きな脳に寄与する《私》」、「《私》が《私》たちへと組織される原理」、「ノードとしての《私》」、「21世紀における《私》の倫理」、「《私》をめぐる身体表象」、福田の13回の各回テーマは、「《名物》は創られる」、「国家が編成する日本の《郷土食》」、「フランス《地方料理》の構築と消費」、「近代日本における嗜好品のイメージ」、「現代日本における飲食表象の布置」、「風景と知覚システム」、「社会的表象と感性 —アナール派歴史学の方法論」、「風景と視線のダイナミズム —風土論的地理学の試み」、「風景と飲食物の表象としての結びつき」、「景観工学は飲食をどう演出するか」、「趣味という実践に隠された社会性」、「日本社会って本当に均質で平等なの?」、「贈答文化は《象徴暴力》!?!」だった。

この各回テーマに合わせて一編から数編のテキストを選定するのが、二人の教員の最初の仕事となる⁽¹⁵⁾。学生のプレゼンは第三回目から始まるので、各学生がどのテキストを選ぶかは、できるだけ早い時期に決定する必要がある。さもないと、第三回目にプレゼンをすることになる学生は、準備期間が極度に短いことになる⁽¹⁶⁾。それゆえに、学生には初回の授業が始まる前にコース・ナビを使って（この場合は四回の操作をいとわずに）、日程を入れた「テキスト・リスト」を送信することになっている。しかし、学生はテキスト名だけではテキストの内容を知ることにはほとんどできない。また、すべてのテキストが図書館にそろっているわけでもない。そのために、「テキスト・リスト」にはそれぞれのテキストの要約も記すことにした⁽¹⁷⁾。

学生は初回の授業終了後に希望するテキストを第三希望まで記したメールを、二人の教員に送ることを義務づけられる。教員はそれらを取りまとめ、「テキスト・リスト」に発表者の氏名とコーディネーターの氏名を記入していく。その際、発表者とコーディネーターの組み合わせがくり返されないように注意することと、発表者が次週にコーディネーターをつとめたりコーディネーターが次週に発表者になったりしないように配慮することが重要である。重要ではあるが、非常にやっかいな作業でもある。前者は一人一人の学生がより多くの学生と協力作業ができるようにするために、後者は学生の忙しさが学期中にできるだけ拡散するようにするための配慮である。

すでに述べたように、「テキスト・リスト」で指定されたテキストがすべて早稲田大学の図書館で入手できるとは限らない。また、たとえ入手できたとしても、一人一人の学生がそれを館外貸し出ししたならば、テキストの入手は事実上困難になる。そこで、「テキスト・リスト」で指定されているすべてのテキストを事前に教員がコピーし、いわばオリジナルを作成し、それを参加人数分印刷し、実費を徴収することにした。

上述した『ゼミを10倍活用するために』の編集と印刷作業もゼミ開始前に終わっておかなければならない。また、前年度のゼミ論の論文集と卒業研究の論文集の編集はそれ以前に処理し、印刷会社に印刷および製本を依頼しておかなければならない。初回の授業に向かう二人の教師には、膨大な量の紙、いや段ボール箱をカートで持参するという物理的な仕事が課せられている。

2.2.2 前期中

2.2.2.1 初回と第二回

テキストの束、二冊の論文集、『ゼミを10倍活用するために』を配布したのち、『ゼミを10倍活用するために』を使ってガイダンスを行う。「授業の目的」、「授業の進め方」、「単位をとるために」、「成績の算出方法」、「レジュメの書式」、「掲示板の書き方」を説明する。とくに毎回の授業前後の課題について、詳細に説明しておく。これらの項目を説明するだけでも、90分間の授業二コマが必要である。

第二回目の授業で、二人の教員がそれぞれ一コマを使いプレゼンをおこなう。教員によるこのプレゼンは、①大枠となる通年テーマを紹介すると同時に、②今後のプレゼンのやり方のモデルを示すこと、この二つを目的としている。コーディネーターは発表者にならないほうの教員がつとめ、レジュメやパワーポイントも用意する。プレゼンの後にはディスカッションの時間がもうけられる。もちろん、授業終了後には、二名の教員も含めて「掲示板」への「書き込み」が義務づけられる。

2.2.2.2 第三回以降

前期の第三回目から学生による発表が始まる。発表者は遅くとも発表の一週間前までには最低一回、教員の研究室を訪れ、発表内容を相談しなければならない。ここでの下ごしらえがしっかりできているかどうか、発表の正否の決定要因となっている。プレゼンでは、与えられたテキストをふまえて、そのテキストから引き出した重要と思われるテーゼを、テキストには含まれない自分なりの対象に適用することが求められる。テキストを十分に理解しているか、テキストと自分で選んだ考察対象とが説得力をもって架橋されているか、資料の扱いは適切かなどが確認されるだけでなく、学生からはパワーポイントや動画の扱いについても質問が出される⁽¹⁸⁾。

発表者とコーディネーター以外の学生も与えられたテキストを予習しなければならない。二人の教員が指定したそれぞれ最低一編のテキスト、つまり合計で最低二編のテキストを読み、テキストについての感想や疑問を「掲示板」に「書き込み」することが課題となっている。これも採点の対象である。

授業は以下のように進行する。①コーディネーター（一人ないし二人）が発表者（一人な

いし二人)を紹介し、当日のプレゼンの内容を先取りし、フロアーの学生たちの関心をひくために、最長5分間程度の「導入」をおこなう。この「導入」の平均はおよそ3分である。「導入」は、寸劇、パワーポイント、動画の提示など様々であり、コーディネーターの創意工夫が発揮される。② パワーポイントを使った発表は、前半部がテキストの要約、後半部が発表者の独自の考察で構成される。全体として45分間程度である。③ コーディネーターが、挙げられたテーゼを中心に発表内容を手短かにまとめたあと、ディスカッションが開始される。ディスカッションには残りの40分間程度が当てられる。コーディネーターは発言を求める学生に発言権を認めるだけでなく、ディスカッションが錯綜した場合、それを交通整理しなければならない。また、原則として発言の優先権は学生に与えられ、教員は学生のなかに発言者がいない場合にのみ発言を許される。これは学生が自分たちの力で、一定の結論に到達するためである。教師が優先的に発言すると、学生は教師が口にする「正解」を聞き、それをメモするだけの「ウェイトィング・モード」に入ってしまう、学生の思考力はほとんど向上しないからだ。ディスカッションの最後には、二人の教師にそれぞれおよそ1分ずつ講評のための発言が許される。ディスカッションがもりあがった場合は、この講評が短縮されることもある。いずれにしても、ディスカッションの時間を管理する権限は、すべてコーディネーターにある。

授業が終了すると、五日以内に「掲示板」に「書き込み」をしなければならない。この「書き込み」は欠席者もすることができる。発表者は授業終了直後に、授業で使ったレジメのワード・ファイルを教員に送信し、教員はそれをホームページにアップロードする。発表者は、他の学生たちが書いた「掲示板」の「書き込み」を閲覧したあと、自分の発表と「掲示板」を参考にして反省点を「掲示板」に書くことが求められる。また、すでに述べたように、二名の教員も発表に関する書き込みを行うことが義務づけられている。

2.2.3 前期終了後

学期中におこなったプレゼンをもとにしてゼミ論を執筆することが求められる。レジメとゼミ論は形式の点でも内容の点でも異なることを、学生に意識させなければならない。レジメでは箇条書きが頻用されるが、ゼミ論は通常、段落ごとにまとまった文章で書かれる。また、発表のあとのディスカッションと「掲示板」の「書き込み」によって発表内容が二重に吟味され、執筆者はそれらをゼミ論に反映させることが求められる。

教員はワード・ファイルのかたち提出されたゼミ論を「修正の履歴」機能を使って添削し、八月の中頃までに各学生に送信する。学生は後期開始直前の締切期日までにゼミ論の改訂版を作成し、再度教員にワード・ファイルのかたちで送信する。教員は提出されたゼミ論を「編集」したのち、印刷会社に印刷と製本を依頼する。

2.2.4 後期開始前

後期は特定のテキストの読解を前提にせず、学生が自分で決めたテーマで発表する。四年生の場合、発表のテーマは卒業研究のテーマとほぼ同一である。学生は八月末日までにテーマを教員あてにメールで通知する。教員は前期と同じように、コーディネーターとの組み合わせおよび

発表日の間隔を勘案して日程表を作成する。後期はさらに、発表者（潜在的にコーディネーターでもある）とコーディネーター（潜在的に発表者でもある）のテーマが重なるように配慮している。そうすることによって、発表者とコーディネーターとの協力がより緊密になるからである。

できあがった日程表は、九月の一週目には学生に通知するようにしているが、最初の数回で発表する学生にとって、準備期間はやはり短い。そこで、前半に四年生、後半に三年生を配するようになっている。これによって四年生は早い時期に、自分の卒業研究の弱点やテーマのさらなる展開の可能性を知ったり、新たな素材のヒントを得ることができる。

2.2.5 後期中

後期はガイダンスを実施しない。初回から学生の発表である。ただし前期と異なり、複数人での発表にはできないので、90分間の授業二コマに三つのプレゼンを組み込まなければならない回も出てくる。その場合、プレゼンは60分間バージョンにならざるをえない。

授業は前期とほぼ同じやり方で進行する。① コーディネーターが発表者を紹介し、短い「導入」をおこなう。② 発表はパワーポイントでおこなわれ、配当時間が60分か90分によって、30分から45分間程度になる。③ コーディネーターがコントロールするかたちでディスカッションがおこなわれる。ディスカッションは、場合により、20分間から40分間程度になる。

前期とは異なり、「掲示板」への「書き込み」は授業終了後だけとなる。前期同様、授業終了後五日以内が期限である。発表者は授業終了直後に、授業で使ったレジュメのワード・ファイルを教員に送信し、教員はそれをホームページにアップロードする。発表者は、他の学生たちが書いた「掲示板」の「書き込み」を閲覧したあと、自分の発表と「掲示板」を参考にして反省点を「掲示板」に書くことが求められる。二名の教員も「書き込み」を行う点は、前期と同じである。

2.2.6 後期終了後

前期と同様に、プレゼンをもとにしてゼミ論を執筆することが求められる。四年生は卒業研究をもってゼミ論に代える。教員による添削と学生による改善をへてできあがった改訂版は、教員によって「編集」されたあと、後期は二冊の論文集になる。三年生のゼミ論を集めたゼミ論集と四年生が提出した卒業研究を集めた論文集である。

2.2.7 補足：合宿

前期の終了直前に毎年恒例の鴨川セミナーハウスでの一泊二日の合宿をおこなっている。合宿では枠となるテーマを決め、そのテーマに関してまず二人の教員がそれぞれプレゼンをした。2009年度は「家族」をテーマにした。そののち参加学生を全部で六つのグループ（構成人数は五人か六人）に分け、未来の「家族」についてポスターと寸劇によってプレゼンすることを課題とした。初日はグループ内でディスカッションをおこない、二日目にプレゼンをおこなった。各グループの持ち時間は20分で、すべてのグループのプレゼンが終了したのち、学生相互の投票により最優秀グループ、最優秀男優賞、最優秀女優賞が決められた。三つの賞には賞品⁽¹⁹⁾も準備しておいた。合宿により合同ゼミのメンバーの親睦が深まっただけでなく、学生たちは協力作業

が有意義であるを感じとることができた。

3. 研究の成果：《複合的》ゼミ運営法を改善し汎用性を高めるために

合同ゼミを実践した結果、冒頭で挙げた二つのテーゼ、すなわち、「学際的なテーマが設定されている授業では、二人以上の教員が同時にゼミに出席し、ゼミの前後でも協力することで、ゼミ自体を「立体化」しなければならない」と「学際的なテーマが設定されている授業では、教員のみならず学生どうしの協力が不可欠であり、かつ、この協力によって年度ごとに到達できた成果をそのままのレベルで次年度に継承させなければならない」の実効性を確認することができた。とはいえ、合同ゼミを持続的に運営するためにはいくつかの問題点も明らかになった。以下では、《複合的》ゼミ運営法の問題点を列挙し、想定できる改善案も記しておきたい。

3.1 教員の協力

《複合的》なゼミ運営は教員の作業量が膨大である。合同ゼミではおおむね、デジタル関係（ホームページや掲示板の管理など）を神尾が、アナログ関係（論文集の編集と印刷など）を福田が担当した。幸いにして、それぞれが管轄する分野は二人の教員にとって不得手なものではなかったので、分業体制はおおむねうまくいっている。

しかしながら、《複合的》なゼミを運営する複数の教員の得意分野がうまく分散するとはかぎらない。そのためにも、できれば有能なティーチング・アシスタントによる補佐が必要である。

3.2 二つの通年テーマ

二人の教員が設定する通年テーマには一定の関連があるほうがよい。大多数の学生は関心の対象を一つしかもっていない。その結果、一つの通年テーマと自分の関心が合致することがあっても、他方の通年テーマと自分の関心はかならずしも合致しないからである。

しかし同時にまた、二つの通年テーマが似たようなものにならないことも大切な条件の一つである。《複合的》なゼミは、学生の多様な関心に対応するためのゼミ形式だからである。比喩的にいえば、二つの通年テーマが二つの中心となって生みだされる楕円形の問題領域のなかに学生の関心が位置づけられれば、それが最良である。

そのためには、二人の教員がかなり早い時期に双方の通年テーマをすり合わせておくことが求められる。

3.3 デジタルファイル用のオンライン・ストレージ

ワードにせよパワーポイントにせよ、学生たちのスキルはゼミの回をおうごとにレベルアップしていった。しかも、合同ゼミでは、学生間でライバル意識が健全なかたちで発揮されたので⁽²⁰⁾、発表者は自分のファイルを公開し、後続の発表者たちがそれを有効活用し改善することを是とした。

しかし、この流れを可能にするインフラとしては、コース・ナビはいささかもたらない。カリキュラム上の科目ごとに分離されており、かつまたクローズドな設定になっていることが大き

な問題点である。学内のオンライン・ストレージがよりフレキシブルになることが必要であろう。

註

- (1) 以下、「合同ゼミ」という語を用いる。「合同ゼミ」の「合同」は、三つのことを意味している。
 - ① カリキュラム上は四つの科目（2008年度では「現代文化演習Ⅰ」、「現代文化演習Ⅱ」、「現代文化演習Ⅲ」、「現代文化演習Ⅳ」）を履修している学生が一つのゼミに属する。
 - ② 三年生と四年生（2008年度では「現代文化演習Ⅰ」と「現代文化演習Ⅱ」が三年生、「現代文化演習Ⅲ」と「現代文化演習Ⅳ」が四年生）が一つのゼミに属する。
 - ③ 二人の教員が一つのゼミに同時に臨席するだけでなく、授業の準備や採点の作業で協力する。
- (2) 2009年度からはタイトルを『ゼミを10倍美味しくするために』に変えた。
- (3) 「装置」としては言及しないが、メーリングリストも開設し利用した。主として懇親会や合宿などのイベントに関する連絡に用いられた。なお、メーリングリストには携帯電話やグーグルなどのメールアドレスを登録させた。
- (4) 「神尾+福田合同ゼミ」（<http://www.waseda.jp/sem-bunka/>）
- (5) 初回の授業で、肖像権について言及し、授業中にデジタル写真を撮影する趣旨を説明したのち、すべての学生からあらかじめ了承を得た。
- (6) 2009年度よりプレゼンで使われたパワーポイントもダウンロードできるようにした。すべての発表者がパワーポイントを使うようになったことと、パワーポイントのクオリティが急激に高くなり、学生が相互にパワーポイントのスキルを「盗みたい」と希望するようになったことが、その理由である。なお、パワーポイントにはパスワードがかけてある。
- (7) 四つのゼミに分割されているので、作業は四回になる。
- (8) 「2.2 ゼミ運営の一年」で詳述するが、合同ゼミは教員のみならず、学生にも多くの作業を要求する。ゼミ運営を円滑にするためにも、ゼミと学生のミスマッチを事前に（二年次のゼミ選択の時点で）避けることは必須である。
- (9) コース・ナビにも「掲示板」の機能をそなえた「ディスカッション」があるが、これも科目ごとに分かれているし、クローズドである。このため、「掲示板」はいわゆるレンタル掲示板を使用している。
- (10) 2008年度前期ゼミ論には『個と世界をめぐるコンストラクションとデコンストラクション』、後期ゼミ論には『目と口からのコンステレーション vol.3 2008後期』、卒業研究集には『De-creationからRe-creationへ vol.2 2008』というタイトルが付けられている。
- (11) 論文集には、内容にふさわしいイラストを配した表紙および裏表紙のほか、教員の手になる「はじめに」と「編集後記」が添えられている。またページは「通し」で付けられている。単に「論文集」とせず、タイトルを付けたのも同じ趣旨からである。
- (12) 2009年度には、すでに本文で述べたように、初回と第二回の授業で、この卒業研究論文集を利用した。すべてのゼミ生には、卒業研究のなかから一編を選び、その論文で目立った「悪文」を指摘し、修正案を提示することが初回到課題として与えられた。第二回の授業でその結果を発表した。また、2009年の夏休みにはすべてのゼミ生がすべての卒業研究を読み、ベストとワーストを一編ずつ選びだすことが課題になっている。
- (13) 以下では、「プレゼン」と「発表」という表現を区別して用いる。90分間の授業は、① コーディネー

- ターによる導入、② 発表者による発表、③ ディスカッションの三部から構成される。この全体を「プレゼン」、②の発表者による発表を狭義の「発表」と呼ぶことにする。
- (14) 教師との面談は大体平均二回である。多い場合は、四回ということもあった。
 - (15) 1回分のテキストは基本的に50頁以内としている。平均すると30頁ほどである。
 - (16) 学生にはテキスト選択にあたって、第三回と第四回にプレゼンをする者には、発表に対してそれぞれ10%増し、5%増しで採点することを宣言している。
 - (17) 2009年度からはこれらのテキスト群の「難易度」も三段階評価で表記するようにしている。
 - (18) 合同ゼミの発表では「レジュメ」は必須であったが、昨年度からは事実上「パワーポイント」の使用も必須化している。
 - (19) 教員のポケットマネーで購入した図書券。
 - (20) そのためにもコーディネーターという「装置」が非常に有効だった。それを補強するために、比較的頻繁に懇親会を開催した。というよりも、自然発生的に学生たちが懇親会を開催するようになってきた。教員主催の懇親会はあくまでも「離陸」用である。

Cooperative seminar for interdisciplinary purposes

KAMIO Tatsuyuki, FUKUDA Ikuhiro

Research interests of the students are becoming more interdisciplinary. The seminar should always be structured interdisciplinarily. But the teachers who are organizing such seminars are not always interdisciplinarily trained. To bridge this discrepancy, we suggest a "cooperative seminar". This report starts with two hypotheses. 1. In an interdisciplinary seminar, more than two teachers must be present and work together both before and after the seminar. It makes the seminar multi-perspective. 2. In an interdisciplinary seminar, a cooperation of the students is also indispensable and the results that have been produced annually must be reflected on the next year seminar.

Then, in order to verify these two hypotheses, we report our experiences in the seminar in detail. 3. In the end we point out some problems of the "cooperative" seminar and suggest their solutions.